様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３７１

研究課題名（和文）フランス実存主義とその外部：ジャン＝ポール・サルトルとアメリカ

研究課題名（英文）Existentialism and its outside : Jean-Paul Sartre and America

研究代表者
澤田　直之（澤田直）（Sawada, Nao）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：９０２７５６６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：フランス実存思想に関して、アメリカが与えた影響と意味をテクスト研究と実証的研究の二面から検討を行った。特に、ジャン＝ポール・サルトルの思想形成を、1944年から46年に行われたサルトルのアメリカ長期滞在を通して検討。黒人問題、植民地問題、マルクス主義への接近といった戦後サルトルの思想の特徴が、アメリカという文化との接触を通じて、形成された過程を検証した。各国の研究者たちと活発に意見を交換することで、フランスとアメリカの思想展開の相互関係を多様な視点から捉えることができた。成果の多くはすでに論文や口頭発表の形で公開してあるが、将来的には書籍の形での公開も視野に入れている。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the importance and meaning of America to Jean-Paul Sartre and the French Existentialism, referring to the texts of Sartre and his biographical facts. Particularly, I examined the relationship between his two long-term stays in the US from 1944 to 1946 and the development of his thought about the question of black people, colonialism, or Marxism. After examining his divers texts concerned to America and sought biographical facts, I think I gave a brief view of Sartre's relationship with America from a multiple angle. The research results are published in the form of articles and papers.

研究分野：哲学

キーワード：フランス文学　哲学　ジャン＝ポール・サルトル　アメリカ

１．研究開始当初の背景

⑴　多くの作家や思想家の場合と同様、20世紀フランスを代表する作家・思想家ジャン＝ポール・サルトルの研究は、これまでもっぱら思想変遷や他の作家や哲学者との比較研究に限られていた。研究代表者もまた、これまでこのような文学史・思想史的なアプローチにより、『〈呼びかけ〉の経験----サルトルのモラル論』（人文書院、2002）をはじめ数多くの研究を発表してきた。しかしながら、このようなテクスト偏重主義によっては、なぜ実存思想が第二次世界大戦後に世界的に受け入れられ、サルトルが知識人として大きな影響力をもつにいたったのかという事実の真の意味を理解ができないのみならず、同時代を主体的に生き抜こうとしたサルトルという作家・思想家の本質を見失うことにもなりかねない。

⑵　本研究は、２０世紀フランス文学・思想研究における上記のような重大な欠落を埋める第一歩とすべく、世界的な影響力をふるったサルトルのケースに注目し、その作品を歴史・社会的コンテクストにおいて再検討しようとする試みの一部である。今回の研究で、サルトルのアメリカ体験が、彼の思想形成にとってどのような意義をもたらしたのかを検討した後、イタリアや、共産圏などとの関係も検討することを視野に入れている。

２．研究の目的

⑴　本研究はこれまでもっぱら両大戦間のドイツ思想との関係によって研究されてきたフランス実存思想に関して、アメリカが与えた影響と意味をテクスト研究と実証的研究の二面からアプローチするものである。第二次世界大戦後に世界的に大きな影響を与えた作家・思想家ジャン＝ポール・サルトルの文学史・思想史的系譜はこれまでも丹念に研究されてきたが、同時代の世界状況、特にアメリカとの関係については、包括的な研究がなされているとは言い難い。

⑵　しかしながら、戦後の実存思想の形成に、アメリカというトポスが果たした役割はきわめて大きいというのが、研究代表者の仮説である。というのも、戦後サルトルがきわめて精力的に論じ、扱うことになる人種差別の問題、植民地問題、あるいはネグリチュードといった諸問題構成は、まさにアメリカ滞在を契機に意識に浮上したからである。のみならず、新世界と旧世界の世界観や歴史観の大きな懸隔は、サルトルに新たな政治観、歴史観をもたらしたことは間違いない。それにもかかわらず、これまでの研究は、このような伝記的な背景を十分に考慮して、テクスト読解を行ってきたとは言いがたい。

⑶　本研究はこのような研究状況の欠落を埋めるべく、フランス実存思想の形成を、1944～1945 年と 1945～1946 年のサルトルのアメリカ長期滞在を通して検討しようと試みるものである。

３．研究の方法

⑴　本研究は、サルトルのアメリカ体験がフランス実存思想の生成にどのように関与したかを探るために、実証研究とテクスト研究の方法を複合的に用いた形で行った。つまり、一方でサルトルのテクストに現れるアメリカの表象や言及を網羅的に検討し、分析した。

⑵　主な対象は、①　アメリカ滞在に先立つ、米国人作家論（『シチュアシオン　Ｉ』所収のフォークナー論、ドス・パソス論）、②　1944～1945 年の第一期滞在中にサルトルが、『フィガロ』紙、『コンバ』紙の特派員として、発表した合計 31 にのぼる記事（長らく単行本未収録であったが 2012 年に新版『シチュアシオン　II』に収録）、③　1946 年に発表されたアメリカを舞台にした演劇『恭しき娼婦』。④　1946 年にサルトル自身が主宰する『現代』誌が 11-12 合併号として発行した 400 頁に及ぶ「アメリカ特集」号。⑤　1947 年に発表された『文学とは何か』、⑥　1949 年出版の『自由への道』第三部のニューヨークヨークの場面などである。

⑶　他方、サルトルの伝記的事実を、『書簡集』、ボーヴォワールの自伝四部作、アニー・コーエン＝ソラル（Annie Cohen-Solal）やヘイゼル・ロウリー(Hazel Rowley)の詳細な伝記、当時の仏英の新聞などを渉猟することで、追跡し、アメリカ滞在時の具体的な交流を探るとともに、同時期にアメリカに滞在していたアンドレ・ブルトンやクロード・レヴィ＝ストロース、ウラディミール・ポズネールといった作家たちがサルトルに言及している部分を探索した。補助的に、晩年のインタビューなども用いた。

⑷　これらの文献調査は予想以上に大がかりのものだったので、当初予定していた草稿研究に関しては断念した。

４．研究成果

⑴　戦後のサルトルの実存思想の形成に、アメリカというトポスが果たした役割はきわめて大きいという研究代表者の仮説は、大筋でその正しさが明らかになったと言える。このことは①人的交流、②文学論、③創作、④思想の四点から解明できた。

⑵　①　人的交流に関しては、まず、1930 年代にパリで親しい交流があったスペイン人のゲラシ夫妻の存在が大きい。夫のフェルナンドは画家で、アメリカの画壇に多くの人脈を持っていたが、戦後サルトルが積極的に美術論の領域に進出するのは、アメリカで多くの画家たちと交流したことも遠因のひとつであろう。だが、何よりも、アメリカで知り合い、彼の愛人となったドロレス・ヴァネッティによって、サルトルはアメリカで多数の作家、知識人と出会うことができた。最大の収穫は、黒人作家リチャード・ライトの知己を得たことである。その交流は帰国後のサ

ルトルにとって、『現代』誌を展開するうえでも大きな原動力のひとつになる。一方、レヴィ＝ストロースをはじめとするアメリカに亡命していたフランス人作家や知識人との交流はきわめて限定的であったことも明らかにできた。

② 文学観について言えば、『文学とは何か』において、文学におけるアンガージュマンの重要性を説いたサルトルであるが、その着想の出発点に、アメリカの黒人の状況および黒人作家たちの創作姿勢がきわめて色濃く影を落としていることが、具体的な分析によって跡づけることができた。誰のために書くのか、という根源的な問いかけは、マルクス主義的な文脈だけでなく、サルトルが滞米中に眼にしたアメリカでの差別状況や、それに対する具体的なリアクションであるリチャード・ライトの作品なしには、あり得なかったことも明らかになった。さらには、作家と読者の関係という、『文学とは何か』の独創的な観点についても、アメリカにおける作家の状況が多くの示唆を与えたことも確認された。

③ 創作に関しては、この米国滞在経験を経て、サルトルはアメリカを全面的に舞台にした唯一の演劇作品『恭しき娼婦』を執筆。そこで、黒人と娼婦を主人公に据え、具体的な黒人差別問題に踏み込んだことの意味は大きい。その後、『汚れた手』や『ネクラーソフ』で政治的な戯曲を書くことになるサルトルだが、ここでは、まさに差別の問題が、社会だけでなく、政治的な要素も含めて展開されている。一方、『自由への道』第三部では、それまでヨーロッパに限定されていた舞台が突如アメリカにまで拡大され、スペイン人画家ゴメスのニューヨークでの生活が描かれるが、そこにはサルトル自身の滞在経験が色濃く反映していることは間違いない。ニューヨークの街を喘ぎながら歩くゴメスが語る街の様子は、アメリカの都市が絵に描かれるのに適さないというサルトルの都市論での指摘と呼応していて、興味深い。

④ 思想について言えば、サルトルが、『フィガロ』紙、『コンバ』紙の特派員として、発表した合計 31 にのぼる記事を通して、明らかにみてとれることは、サルトルがそれまで慣れ親しんできたものとは決定的に異質な空間、そして文化を発見したということである。ヨーロッパ人にとって、「町が何よりも過去である」のに対して、アメリカ人にとって、町が「まず未来であり、彼らがその中に愛しているものは、それがまだないすべてのもの、それがありうるすべてのものである」という分析に端的に示されているように、アメリカの発見は、サルトルのそれまでの歴史観をも大きく揺るがすものであった。そして、移動が常態であるアメリカに、人類の今後のあり方を見てとるサルトルは、この問題構成を後に社会問題のうちに探ることになる。さらに植民地問題をサルトルが積極的に論じることになる背景も、これらの記事の随所に見てとることができることもきわめて重要である。

⑶これまでサルトルすなわち反米という紋切り型の思考のために、サルトルにおけるアメリカというトポスは主題的に研究されてこなかったわけだが、アメリカという新世界において 19 世紀的な教養人であったサルトルがいかに 20 世紀の作家として脱皮するのかを、四つの観点から検証することができたと確信している。

⑷ 本研究の成果に関しては、多くの学会で発表したほか、編著書『移動者の眼が露出させる光景---越境文学論』所収の「野営地と廃墟-------ジャン＝ポール・サルトルの見たアメリカ」をはじめ多くの論文の形で公刊し、すでに多くの研究者から肯定的な反応をもらっており、十分な成果が得られたものと確信している。また、定期的に参加した海外での国際学会の際にも数多くの研究者と意見を交換したのみならず、2015 年 3 月から 4 月にかけてパリ第 8 大学に客員教授として招聘された際には、授業や共同研究会の折に、研究成果の一端を披瀝し、教員や研究者たちときわめて有意義な意見交換を行うことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① Nao Sawada, « Marguerite Duras au bois dormant : la figure de la dormeuse »、『立教大学フランス文学』査読有、44 号、pp．69-82 (2015)

② 澤田直、「他者の現象学、プルーストを読むサルトル」『言語文化』（明治学院大学言語文化研究所）査読無、32 号、pp．78-94 (2015)

③ ジョルジュ・バタイユ、澤田直、「メルロ＝ポンティへの公開書簡」『別冊水声通信バタイユとその友たち』（水声社）査読無、pp．88-95（2014）

④ Nao Sawada, « Sartre et la photographie : autour de la théorie de l'imaginaire », *Études françaises*, « Jean-Paul Sartre, la littérature en partage », 査読有、vol. 49, n° 2, pp. 103-121 (2013)

⑤ Nao Sawada, « L'expérience de la guerre dans *Les Chemins de la liberté* », *Revue des Sciences Humaines*, n° 308 octobre - décembre 2012, « Autour des écrits autobiographiques de Sartre », Presses Universitaires du Septentrion, 査読有、pp. 147-160（2012）

⑥　澤田直、「サルトルにおける同性愛の表象と役割」『別冊　水声通信　セクシュアリティ』（水声社）査読無、pp. 185-201（2012）

⑦　澤田直、「サルトルの文体論」『青山総合文化政策』（青山学院大学）、査読有、第５号、pp．99-120（2012）

〔学会発表〕（計　８件）
①　Nao Sawada, « La question de genre en philosophie : Sartre et la sexualité », « Littérature, philosophie, esthétique »　2015 年 3 月 20 日（於高等師範学校（l'Ecole normale supérieure），パリ、フランス）

②　澤田直、「文学と哲学の分有　デリダとサルトルの文学論」日本サルトル学会、2014 年 12 月 6 日（於立教大学、東京都豊島区）

③　Nao Sawada, « L'exotisme au-delà de l'orientalisme »,　Institut Français 主催『北東アジア・フランス語圏大学（Université Francophone d'Asie du Nord-Est）』、2014 年 8 月 31 日、（於中央研究院（Academia Sinica）、台北、台湾）

④　澤田直、「他者の現象学、プルーストを読むレヴィナス、サルトル」『明治学院大学文学部フランス文学科主催コロック「プルーストと 20 世紀」』2014 年 5 月 10 日（於明治学院大学、東京都目黒区）

⑤　澤田直、ワークショップ「共にあるということはどういうことなのか？―――共同体論再考」日本フランス語フランス文学会春季大会 2014 年 5 月 25 日（於お茶の水女子大学、東京都目黒区）

⑥　澤田直、ラウンド・テーブル「デュラスの多面性」、『マルグリット・デュラス生誕 100 周年』2014 年 3 月 1 日（於立教大学、東京都豊島区）

⑦　澤田直、「夢、亡霊、遊び：アントニオ・タブッキに耳を澄ます」、シンポジウム『アントニオ・タブッキ　水平線の彼方へ』2013 年 10 月 20 日（於イタリア文化会館、東京都千代田区）

⑧　澤田直、「断章、イメージ、母性」、シンポジウム『サルトル／バルト』（主催：東京外国語大学、2012 年 12 月８日（於東京外国語大学、東京都調布市）

〔図書〕（計９件）
①　澤田直　他、『サルトル読本』法政大学出版局、2015、420（III-VI，23-28、34-52，371-385，(13)-(22)）

②　ジャン＝ポール・サルトル、澤田直　他『家の馬鹿息子　４』人文書院、2015、446(267-338)

③　井上隆史、澤田直　他、『全体と部分』、弘学社、2015、187(79-89)

④　澤田直　他、『移動者の眼が露出させる光景---越境文学論』、弘学社、2014、225(4-6，189-219)

⑤　澤田直　他、『マルグリット・デュラス生誕 100 年　愛と狂気の作家』河出書房新社、2014、239(167-174)

⑥　フレデリック・グロ、澤田直　他、『創造と狂気』法政大学出版局、2014、310(1-279，(1)-(16))

⑦　塚本昌則、澤田直　他、『写真と文学　何がイメージの価値を決めるのか』平凡社、2013、377(277-293)

⑧　Benedict O'Donohoe (ed), Nao Sawada　et al., *Severally Seeking Sartre*, Cambridge Scholars Publishing, 2013,206(12-36)

⑨　澤田直、『ジャン＝リュック・ナンシー分有のためのエチュード』白水社 2013、273

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　直之（Sawada, Nao）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：90275660

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし

(4)研究協力者
ジル　フィリップ（Gilles Philippe）ローザンヌ大学教授
フランソワ　ヌーデルマン (François Noudelmann)パリ第 8 大学教授
ヤン　ハンメル (Yan Hamel)モントリオール大学ケベック校教授